

『上海』試論

はじめに

横光利一の代表作のひとつに数えられる『上海』は、雑誌『改造』初出時には、『上海』というタイトルで発表されたわけではなかった。⁽¹⁾むしろ、横光としては、作品をできるだけ実在の上海という土地そのものから切り離して、「上海ともどこともせず、ばかり東洋の塵埃溜にして了つて一つさう云ふ不思議な都會を書いてみたい」という野心を抱いていたらしいということが知られている。⁽²⁾

『上海』研究に一つの画期をもたらしたと思われる、前田愛の「SHANGHAI 1925」⁽³⁾では、地図や史実と『上海』中の記述を対照してみせた後、具体的な地名およびクロニクルが作品中に見出せないことを指摘し、さきの横光の発言をその根拠として挙げている。

しかし、それでは、次のような横光の発言についてはどう考える

べきであろうか。

「全篇を纏めるにあたつて、突然上海事變が起つて來たので題名には困つたが、上海といふ題は前から山本氏との約束もあり、どうしたものか自然に人々もそのやうに呼び、またその題以外に素材と一致したものが見當らないので、そのまま上海とすることにした。」⁽⁴⁾

ここでの「人々」というのが、一般の読者であるのか、それとも、彼がこの小説を書くに先立ち上海へ行つたことを承知している横光の周辺の人々であるのかは判然としないが、⁽⁵⁾しかし、ひとつ言えることは、この作品そのものには、「これは上海での出来事である」と断らずとも、上海という街を彷彿とさせるものがあつたというこ

廣 重 友 子

となのだ。その鍵が奈辺にあるのかをあぶり出してみたいというのが本論執筆の動機である。

なお、『上海』はその執筆時期も長期に亘り、大きな改稿も度々行われ、かなり字句や文章の変更、章の入れ替えなどがみられる。すなわち、昭和三年から四年、六年にかけて『改造』に連載していたもの（単行本になるまえに改稿されているものも含む）、加筆修正を加えて昭和七年に改造社から出されたもの、そして昭和十年に書物展望社から出されて横光自身が決定版としたもの、という三つの版がある。便宜上、順に『改造』初出版、初版本、決定版と呼ぶことにする。分析にあたっては、『定本横光利一全集』に収められている初版本を底本とするが、必要に応じ、適宜『改造』初出版や決定版を参照することとする。

第一章 「上海」と「出来事」の分析に関する問題提起

さて、さきにも述べたが、『上海』を実際の地図や史実に照らし合わせ、「都市小説」と定義づけたのは、前田愛の「SHANGHAI 1925」である。その後、『上海』研究は、小森陽一や中村三春らによって、精緻を極める記号論的分析の方向へと向かう一方で、実際の上海や五・三〇事件と『上海』とを照合して、『上海』に描かれた場所や事件を比定する試みがなされてきた。⁽⁷⁾

そこで、これら二つの流れの分水嶺ともなった前田愛の「SHAN-

GHAI 1925」にたちかえり、『上海』に描かれた街「上海」の広がり、そこで生じた「出来事」の時系列の分析に関する問題点を洗い出してみることからはじめたいと思う。

「SHANGHAI 1925」での前田の目的はいささかねじれた印象を与える。前田の目的は、「横光は五・三〇事件の『歴史』を、『上海』の作品空間に変換するにあたって、どのような操作を試みているのか」を解きあかすことであり、「歴史」がどのように「上海」の「時間」に変換されたかを解きあかすことは、彼の目的には入っていないのである。前田が「時間」について語っているのは、実のところ以下の一文のみなのである。

空間の座標軸を意識的に外してしまった『上海』の方法は、時間の処理にも貫徹されている。瓦斯燈の光に照らしだされたアカシヤの花や吹雪のようにこぼれるプラターンの花から、私たちは『上海』のものがたりが、晩春から初夏にかけての季節を背景にしていることを知る。しかし、肝腎の五・三〇事件をめぐるクロニクルに相当するものは、直接には何の手がかりも与えられないのだ。⁽⁹⁾

ここである「上海」の方法」とは、横光が具体的な地名を「上海」から意図的に排除しているということを指している。それが

「時間の処理にも貫徹されている」ということは、つまり「時間」においても具体的な日付が排除されているということである。

前田は、この具体的な地名や日付が『上海』から消去されているという点を強調しつつ、『上海』と映画との関連について言及し、結論として、『上海』は、流動する「イメージ」群を方向づける「植民地都市」「革命都市」「スラム都市」の三極の「ベクトル」のあいだにはたらく力により物語が進行し、「植民地都市」では宮子、「革命都市」では芳秋蘭、「スラム都市」ではお杉という三人の女性を媒介として、「カメラ・アイ」である参木が「都市の表層から深層に下降する構図をもった都市小説」であるとしている。

この結論を導き出す前提として、「植民地都市」「革命都市」「スラム都市」という三つの「ベクトル」によって方向付けられる「イメージ」は、あくまでも参木を通してみた彼女たちの背後に浮かぶ「イメージ」でなければならないはずだ。なぜなら、「参木の前にあらわれる女性たちは、彼にとって『濁った底知れぬ虚無の街の上海』のさまざまな局面をひらいてくれる媒介者^{メデイエイク}(¹⁰)」という性格づけが行われているからこそ、参木はそれぞれの「媒介者^{メデイエイク}」を経て「都市の表層から深層に下降する」ことが可能となるからである。

しかし、前田のいう「植民地都市」を背景に宮子が浮かび上がるとき、彼女が関わっているのは参木ではなく、甲谷である。参木は宮子とは踊らず、プレゼントを貢ぐこともない。つまり植民地都市

の経済機構が変換された「『愛情』の形式⁽¹¹⁾」と参木は無縁なのである。「公園やダンスホールを明るませている光の罫にとらえられていた⁽¹²⁾」のが甲谷である以上、参木による三極の移動という『上海』の深層構造は成立しない。「革命都市」の極に関しては、第二第四章で参木と秋蘭が旗亭まで歩く場面の水色の皮襖を着た秋蘭は、のどかな古きよき「支那街の風景⁽¹³⁾」を背景としている。この場面を排除しない限り、「革命都市」の極と秋蘭とを結びつけるわけにはいかない。また、春婦となったお杉は、第三二章、プラタンの花が降る「橋の袂の公園」で噴水を眺め続ける⁽¹⁴⁾。しかし、前田の図式によると、霧雨のように降る花と「橋の袂の公園」にまつわるイメージは宮子のものであったはずだ。

この三極構造の抱えた問題は、「上海」という街の姿を映し出す「カメラ・アイ」として、参木を特権的な存在に据えたところにあるのではないだろうか。もし、参木に「カメラ・アイ」という役割をふりあてると、参木が関係していない出来事に言及することが不可能となるはずだ。なぜなら参木はそもそも、登場人物のひとりにすぎず、『上海』の全貌を知りうる超越的な語り手として設定されているわけではないからである。前田は巧みに回避してはいるものの、ここからは横光利一と参木の同一視が透けてみえる。

同様のあやうさが、実際の上海と『上海』に描かれた「上海」、史実としての五・三〇事件と『上海』に描かれた「出来事」との関

係においても見て取れる。實在の土地や事件を背景としているからといって、實在の土地を作品中に描き出された場所と同一視することや、史実を作品中の出来事と同一視することは適当ではない。これは『上海』の記述を、『上海』外部の情報、すなわち地図や史実と比較する際の方法の問題に由来すると思われる。

「SHANGHAI 1925」を始めとする諸論は、分析の際に位相の異なるイメージを比較しているということに無頓着である。ある土地にまつわる場所のイメージは人ごとに無数に存在するが、それらはやがて歴史的・社会的な調整を経て、強力かつ広汎な喚起力を伴って流通するようになる。それぞれのイメージがどの位相のものであるかは、分析の際に押さえておかねばならないことである。

具体的に『上海』で考えてみると、まず、一般に現実と呼ばれている、上海という街の存在が前提となっている。そして作者たる横光利一が訪れた街から直接得た上海のイメージ、『上海』の読者が直接得ることのできる上海のイメージがある。

また、直接体験したわけではなくとも、資料等から得た情報によって再構成される、史実としての上海の姿がある。現在の『上海』の読者で一九二五年当時の上海に行ったことがある人はまれであろう。もし当時の上海を知ることが出来るとすれば、それは何かによって再構成された、当時の上海のイメージである。それは、一九二八年に上海へ渡り、すでに『上海』のモデルとなった一九二五年の

五・三〇事件当時の上海を間接的にしか知りようがなかった横光も同様である。さらに、横光が『上海』で描き出そうとした「上海」という街と、読者が『上海』から得る「上海」という街のイメージの位相の相違も考えうる。

それは、「史実」と『上海』との関係について分析するときにもいえる。ある出来事が歴史として語られていく過程でも、その出来事がいかに語られるかという社会的調整は行われているのである。館下徹志は「横光利一『上海』の五・三〇事件」と題した論考のなかで、各方面から発せられる言説をもとに、「史実」を問い直す作業を行っている⁽¹⁵⁾。この点に関して「SHANGHAI 1925」をみてみよう。五・三〇事件の「史実」について述べた後、前田はこういう。

この場面にとりあげられた「歴史的事実」の一つ一つは、たしかに現在明らかにされている事件の経過と対応している。しかし、それはどんなに荒唐無稽な噂や風評もその中に一片の真実がこもっているのと同じことで、ジグソーパズルの並べ方そのものがどこか狂っているのだ。五月三十一日になって結成された上海总工会の存在を二週間以上も繰りあげている錯誤は許せるにしても、「工部局属の印度人警官」を射殺事件の共犯者に仕立て上げた「虚構」は、中国工人の正当な主張を不当な言いがかりに切り下げるためとしか思われない⁽¹⁶⁾。

印度巡捕の発砲については、上海十五日発五月十七日付東京朝日新聞の記事によると、「會社は警官の保護を乞ふたが職工は尙聞かぬため遂に印度人巡査は發砲するに至り職工側に負傷者を生じて退散した」とある。また十月に出された『上海事件の報告』⁽¹⁷⁾によると、「後日に到り明白となりしことであるが當日門側には印度巡捕の外日本人も數名ピストルを所持し警戒し居り印度巡捕同様發砲したもののらしい。此事は内外棉會社では最初極秘にして居^(マタ)だが、此事實判明したるを以て日本總領事館當局では直ちに本件に對する取調べに着手した。」となっている。

これらには、印度人警官も發砲したと報じられているために、一概に『上海』の記述が「不当な言いばかり」とは言い切れない。横光の得ていた情報がもともとこのようなバイアスのかかったものであった可能性を考えたとき、一概にこれを「不当な切り下げ」と決め付けることはできないだろう。

ここでの前田の評価は「歴史的事実」とどれほど合致する部分が多いかによってなされ、「歴史的事実」と整合しない部分を「虚構」としている。だが、たとえ「歴史的事実」との整合性を保つ表現がなされていたとしても、その表現が横光によって小説の中に繰り込まれているという点においては、『上海』という虚構を構成する一部であることにはかわりはない。また、横光が「上海總工会の存在を

二週間以上も繰りあげている」ことを「錯誤」と捉えていることも、「歴史的事実」と小説を混同しているといえるであろう。

それを避けるために、本論では、具体的な「地名」や「日付」が排除された『上海』が、横光によっていかなる組み立て方をなされているか、という前田が設定した問題に、前田の採った方法とは異なるアプローチで接近することで、改めて、『上海』の内部構成を明らかにし、『上海』を組み立てた横光の意図を探ることを主たる目的とする。

そのためには、『上海』の記述を丁寧に手繰っていくことから始めたい。その作業から、『上海』を構成する横光の手法が如何なるものであるかを見いだし、その内部構成について明らかにする必要がある。『上海』の外部の情報との照合は、その後に行われるべき作業である。まずは、次章で、『上海』を構成する横光の手法について考えてみたい。

第二章 『上海』のなかの「上海」での「出来事」

さて、既に指摘されているように、『上海』は様々な捉え方をされてきた。中村三春のまとめるところによると、「前田愛の『都市小説』、平岡敏夫の『政治小説』、栗坪良樹の『状況』小説、林淑美の『民族の問題を表現として定着させた『上海』」、金井景子の『租界人の文学』、あるいは二瓶浩明の『恋愛小説』であり、『思想小

『説』である』などの言葉のように、諸家の言説は微妙に重複しながらも一致しない。⁽¹⁸⁾」

しかしそれは、そこに登場する人物群の組み合わせによって決まると考えることもできるだろう。銀行を餌になる参木、商社マンの甲谷、欧米人のビジネスマンたち、民族資本家銭石山とくれば、これは経済小説と呼んでよいかも知れないし、トルコ風呂の女主人で銭石山の妾のお柳、トルコ風呂の湯女で後に私娼となるお杉、ダンスホールで一番の人気を誇る踊子の宮子、ロシア革命を逃れて上海まで落ちのびてきた白系ロシア人貴族で今は山口の妾になっているオルガ、死体から人骨の標本をつくる「死人製造會社」の山口とくれば、いわゆる魔都上海について語ることもできるであろう。また、共産党の女性工作員である芳秋蘭、罷業の標的となった在華紡の工人係の高重、在華紡に再就職して騒動に巻き込まれる参木、アジア主義者を名のる山口、インド国民会議派のアムリとくれば、共産主義と民族運動をめぐる思想と革命について語ることも可能であるし、錯綜する男女関係をとりあげれば、恋愛の物語を軸に据えることも出来るだろう。

もちろん、これが『上海』の登場人物のすべてではない。しばしば点景として描かれる路上の乞食や娼婦、黄包車を引く苦力や紡績工場の女工たち、印度人の工部局警官や安南兵など、一人ひとりに名を与えられているわけではないが、重要な人物群が要素所に配

されている。

以上の人物群が様々に行動することで、『上海』という小説は展開していくわけであるが、彼らの動きや行く先をたどっていくと、おもしろいことが見えてくる。すこし具体例をあげてみよう。ここでの中心人物は、トルコ風呂を餌になり、次の職を探しているお杉と、同じく勤めていた銀行を餌になった参木である。

引用一 ふと彼女は露路の入口で賣卜者を見つけると、その前で立ち停った。(中略) 賣卜者の横には、足のとれかかったテーブルの屋臺の上に、豚の油が淡黄く半透明に盛り上つて縮れてゐた。その縮れた豚の油は、露路から流れてくる塵埃を吸ひながら、遠くから傳はる荷車の響きや人の足音に、絶えずぶるぶると慄へていた。小さな子供がその背の高さを、丁度テーブルの面まで延ばしながら、じつと慄へる油に鼻のさきをひつつけていつまでも眺めてゐた。その子の頭の上からは、剥げかかった金看板がぞろりと下り、彈丸に削られた煉瓦の柱はボスターの剥げ痕で、張子のやうに歪んでゐた。その横は錠前屋だ。店いっぱいに擴がつた錆びついた錠が、蔓のやうに天井まで這ひ上り、隣家の鳥屋に下つた家鴨の首と一緒にたつて露路の入口を包んでゐる。間もなく、豚や鳥の油でぎらぎらしてゐるその露路の入口から、阿片に青ざめた女達が眼を鈍らせながら、蹣跚

と現れた。(中略) もういつの間にか夜になつてゐる街角では、湯を賣る店頭の黒い壺から、ほのぼのとした湯氣が鮮かに流れてゐた。(中略) 馬車屋の前では、主婦が馬の口の傍で粥の立食ひをやつてゐた。⁽¹⁹⁾

引用二 お杉は雜鬧した街の中で車を降りた。彼女は露路の入口へ立つと、通りかかった支那人の肩を叩いて云つた。

「あなた、いらつしやいな、ね、ね。」

湯を賣る店頭の壺の口から、湯氣が馬車屋の馬の鬣へまつはりついて、流れてゐた。吊り下つた薪のやうな乾物の谷底で、水々しい白魚の一群が盛り上つたまま光つてゐた。⁽²⁰⁾

引用三 彼はお杉のある街の道路が、だんだん家並みの壁にせばめられていくに従つて、いつか前に、度々ここを通つたときに見た油のみなぎつた豚や、家鴨の肌がざらざらと眼に浮んで來てならなかつた。そのときこの道路では、いくつも連つた露路の中に霧のやうにいつぱいに籠つて動かぬ塵埃の中で、ごほんごほんと肺病患者が咳をしてゐた。ワントン賣りの煤けたランプが、搖れながら壁の中を曲つていつた。空に高く幾つも折れ曲つていく梯子の骨や、深夜ひそかにそつと客のやうな顔をしながら自分の車に乗つて楽しんでゐた車夫や、でこぼこした石

ころ道の、石の隙間に落ち込んでゐた白魚や、錆ついた錠前ばかりぎつしり積み上つた古金具店の横などでは、見る度に剝け落ちていく青い壁の裾にうづくまつて、いつも眼病人や阿片患者が竝んだままへたばつてゐたものだ。⁽²¹⁾

これらはそれぞれ第九章、第二章、第四章からの引用であるが、並べてみると共通項が浮かんで來はしないだろうか。まず、引用一と二からは、ともに「湯を賣る店」と「馬車屋」が近くにある露路の入口あたりの描写であらうと見當がつく。さらに、引用一と三では「豚」「家鴨」「錠前屋」「古金具店」など、引用二からは「白魚」に言及しているところが眼をひく。これらは、おそらく同じ場所について語っているのであらう。『上海』という小説に描き出された「上海」という街は、かなり具体性を帯びた建物の位置関係や微細な事物の描写によって組み立てられているのだ。

ところでこの場所は、前田によって指摘されている、『上海』で唯一地番が明らかなお杉の売春宿「四川路十三番八號の皆川」へと続く露路附近なのである。それは登場人物の動きを手繰ることではじめてわかつてくることである。⁽²²⁾ なぜならば「四川路十三番八號の皆川」にお杉がいるということは、さきの引用とはまったく別の甲谷とお柳との会話で明かされているからである。単に「四川路の十三番八號の皆川」を「実在の地名」と捉えた場合、それはお杉の居

場所としての意味しか持たなくなる。ところが、お杉が行動する先々の様子や、お杉を尋ねていく参木の記憶から、彼女のいる売春宿へと続く露路の入口の様子などをあわせて考えると、「上海」という街の広がりを知るための重要な手がかりになり得るのである。

但し、『改造』初出版にはこのお杉の売春宿の住所に関する記述はみられない。ここでの底本となっている初版本の「四川路の十三番八號の皆川」（第二十八章）には異同があり、第四三章では「北四川路八號の皆川」となっている。改稿によって生じる、このような異同のもたらす影響については、後に詳述する。

また、『上海』に描き出された様々な「出来事」も、「昨日」「三日後」「朝」「夕映え」といった表現に着目することで、「出来事」を時系列に沿ったかたちで再構成することができる。具体例を挙げてみよう。

引用四 その窓のガラスには、動亂する群衆が總て逆様に映つてゐた。（中略）参木はそれらの廻りながら垂れ下つた群衆の中から芳秋蘭の顔を探し續けてゐたのである。と、彼は銃聲を聞きつけた。（中略）

「もう、どうぞ、僕にはかまはないで、あなたのお急ぎになる所へいらつして下さい。」

「ええ、有りがたうございます。あたくし、今は忙しくつてな

りませんの。でも、もう、あたくしたちの集る所は、今日は定つてをりますわ。それより、あなたは、今日はどうしてこんな所へお見えになつたんでございます。」と秋蘭は云つた。

「いや、ただ僕は、今日はぶらりと来てみただけです。しかし、あなたのお顔の見える所は、もうたいてい僕には想像が出来るんです。」

（中略）

「でも、それではあたくし、歸れませんわ。明日になれば、きつとまた市街戦が始まります。（中略）では、あたくし、特別會議の日の夜、もう一度ここへ参りますわ。さやうなら。」⁽²³⁾

引用五 参木はこれらの膨張する群衆から逃れながら、再び昨日のやうに秋蘭の姿を探してゐる自分を感じた。（中略）と、ふと浮き上る彼の心は昨日秋蘭を見る前と同様の浮沈を續け出すのを彼が感じると、やがてホースの水の中から飛び出るであらう彈丸を豫想した。（中略）これらの群衆は暫くは警官隊の騎馬の鼻先を愚弄しながら、だんだん總商會のホールの方へ近づいていった。そこでは、前から集合してゐた商會總聯合會と、學生團體との聯合會議が開催されてゐたのである。（中略）参木にはこれら共產黨と資本家團體との一致の會合が、二日の後に開催される外人團の納稅特別會議に對する威嚇であることは分

つてゐた。しかし、それにしても、もしその日の納税特別會議が——外人の手で支那商人の首を一層確實に締めつける關稅引上げの議案を通過させれば、——參木には、その後の市街の混亂は全世界の表面に向つて氾濫し出すにちがひないと思はれた。⁽²⁴⁾

引用六 參木はもう一度秋蘭に逢ひただけだ。然もその可能は明後日に開かれる特別會議の夜だけに、かすかに盜見するほどのことであつた。⁽²⁵⁾

引用七 その日の夕刻、騷擾の分水嶺となるべき工部局の特別納税會議が市政會館で開かれた。(中略)丁度參木の來たのはそのときであつた。會館附近の交通遮斷線の外では、街々の露路から流れて來た群衆は街路の廣場に溜り込んだまま、何事か待ち受けるかのやうに互に人々の顔を見合つてゐた。參木はそれらの人溜りの中を擦り抜けながら、その中に潜んでゐるにちがひない秋蘭の顔を捜していつた。もし彼女が彼との約束に似た暗黙の言葉を忘れないなら、彼が彼女を此の附近で捜し續けてゐることも忘れない筈であつた。⁽²⁶⁾

引用四から七まで、一貫して関わってくるのは「納税特別會議」である。引用四の參木と秋蘭との会話から、この日より「特別會議

の日」が後のことであることがわかる。また、引用五は引用四の翌日であることが、「昨日のやうに秋蘭を探してゐる」という參木の行為や、引用四の冒頭に対応する「昨日秋蘭を見る前と同様の浮沈」という記述からわかる。そして、引用五の「二日の後」に「納税特別會議」があることが示されている。また、引用六では「特別會議」(これは「納税特別會議」の略称であろう)が「明後日」となっている。とすると、引用五と六は同日の出来事であると考えてよい。そして、引用七では「特別納税會議」が開かれているので、引用五と六の「二日の後」になつてゐるということがわかる。

以上を整理しよう。引用四の翌日が引用五・六、その二日後が引用七ということになる。こうして、それぞれの引用部分の「出来事」に関する記述から、それらの前後関係が明らかになつていくのだ。

このように、「上海」中の微細な情報を丹念に拾ひ上げることから、「上海」という街の姿とそこでの「出来事」が浮かび上がってくるのがわかる。これはすなわち、「地名」や「日付」によるイメージの喚起力に頼らずとも、『上海』を強い具体性とともに組み上げるために横光が施した仕掛けであると考えてよからう。

第三章 「上海」と「出来事」の再構成

但し、上述したような検討が『上海』に対してなされるために、

筆者は、『上海』の物語内部の「時間」の経過が、「工場」や「街路」での動乱の場面などの描写を除き、ほぼわれわれの日常の生活実感における時間の経過の感覚と齟齬^{そご}をきたすことがない、という点を前提としている。『上海』のなかの「昨日」は、われわれ読者にとっても同様に前日のこととして捉えられるものである。また、同様に、「上海」という街についても、われわれの生活実感を裏切るような「空間」の構成にはなっていないということが前提となっている。「道を曲がる」とあれば、その登場人物がどこかの角を曲がって別の道へ出たのであらうと考えているのである。

この点に疑問が差し挟まれていないことは、先行研究の数々において『上海』に描かれた都市を語る際、現在の上海の地図上に『上海』にあらわれた場所の位置が書き込まれていたり、実際の上海の地図と『上海』にあらわれた場所の位置の比較というかたちをとっていたり、史料との対比が行われていることからわかる。⁽²⁷⁾『上海』という街の在りようは、われわれの生活実感に基づく実際の上海という街の在りようとは基本的に異なるものであるということが、前もって了解されているのである。

また、登場人物たちがA地点からB地点へ移動する際には、とりたてて記述がなくても、そこに幾ばくかの時間的経過が必然的に予想されている。逆に、前の場面ではA地点にいた人物が、次の場面でB地点にいる場合、その人物がA地点からB地点へ移動したと考

えることに無理が生じない。言い換えると、「上海」とそこでの「出来事」の再構成は、登場人物の「上海」での行動と、「上海」での時間の経過とを相互に関連させることによって可能となっていくのである。

第一節 環境の知覚によるアプローチ

ところで、日常の生活実感のなかで、いちいち「ここは何丁目何番地」と考えながら街を歩くことがあるだろうか。おそらく、地図や住所をたよりに初めてその場所へいくという場合ならそれもあるだろうが、そこが慣れ親しんだ場所であればあるほど、見慣れた角を右へ曲がり、その先を左へ曲がるという、眼に入ってくる情報をたよりにした、無意識的な行動をとっていると考えることができるのではなかろうか。

知覚心理学者のギブソン(J. J. Gibson)は、人間に限らず、動物が生息している環境内で、ある場所に至る経路を学習することを定位(orientation)と呼んだ。見知らぬところで目標へ至る道筋を把握した場合、定位できるようになったということになる。つまり、定位している状態というのは、「道がわかる」ということなのである。⁽²⁸⁾

どのように「道がわかる」ようになるかというと、それは、ある経路を移動することで得られる周囲の「景色」(vista)の連鎖を把

握することによる。⁽²⁹⁾ 観察者が移動することにより、観察者の視野に入る「景色」は連続して変化する。しかし「生息環境には決して同じものがないのだから、おのおのの景色はそれ自身の『標識』である」ことから、「探索的移動によって景色が整然となると、家、町、あるいは生息環境全体の不変的構造がとらえられるであろう。隠れたものと現れているものとが一つの環境となる。」

また、何が見え、何が見えないかは、その「景色」を見ている観察者次第である。観察者が頭や眼を動かせば、見えていた「景色」が視野の外に去り、視野の外にあったものが視野に入ってくる。頭や眼をもとにもどせば、さきに見ていた「景色」が視野に入ってくる。観察者が移動するにつれて、「景色」も移り変わる。つまり、何が見えているかという情報は、同時に観察者自身が何をしているかという情報でもあるのだ。

さらに、「同じ経路を別の観察者が通ることもありうる。もし一群の観察者が動き回れば、光学的変形および遮蔽の下で同じ不変項がすべての者に効くことになる。その不変項が知覚される限りにおいて、すべての観察者は同じ外界を知覚することになる。⁽³⁰⁾」つまり、複数の観察者によって、とある生息環境における不変的構造が同じものと知覚されれば、それは同じところであると考えうるのである。

さて、上記のギブソンによる知見をここでの問題意識にひきつけ

て考えてみよう。すなわち、各々の登場人物が眼にしている「景色」に関する記述を整理することにより、「上海」という街が不変的構造として捉えられる。また、各々の登場人物が眼にしている「景色」に関する記述から、逆に、登場人物が何をしているかもわかってくるのである。例をあげると、第三八章でカンナの花壇を突き抜け、芝生に出た参木が「露を吹いて湿つてゐる鐵の欄干を握つて、足もとの波を見降ろした」ということは、参木が公園の端、波打ち際の鉄柵まで歩いて行ったことを必然的に想像させるのである。

第二章でも指摘したとおり、『上海』には多くの人物が登場するため、同じ場面でも視点人物が入れ替わったり、視点人物を相対化する語り手によって物語が進行することがある。読者はその時どきで複数の視点を介して『上海』を読み進んでいくことになるのだ。

このような場合、視点人物として特定の人物をとりあげることは、第一章で詳述したように、『上海』の矮小化につながる可能性はらんでいる。

そこで、特定の固定化された視点人物を設定するのではなく、登場人物群と登場人物を相対化する視点（本稿では「外部」の視点とする）も含めて、「上海」「出来事」を構成していく視点を想定することで、特定の地名や日付に頼ることなく組み上げられた、『上海』の全体像を再構成してみたい。

第二節 「上海」内部の位置関係

上記の観点から『上海』に描かれた主な場所を登場順に列挙すると、「突堤」「トルコ風呂とその周辺」「踊場（サラセン）」「参木宅」「常緑銀行」「村松汽船會社」「橋」「赤色ロシア領事館」「参木とお杉の行った旗亭」「茶館」「公園」「パレスホテル」「山口宅」「バーテル」「高重宅」「東洋綿絲會社」「宮子宅」「酒場」「秋蘭宅」「支那街の旗亭」「食堂」「裸踊り」「アムリの寶石店」「お杉の売春宿」「市場」「ホテル」となる。

これらはいわば、点として捉えられる場所である。そしてこのままでは「上海」に存在する場所の羅列に過ぎない。これらの点的要素をつなぐ線として、登場人物の移動経路、すなわち、河や泥溝、街路や露路といった場所を加味して考えることで、かなり「上海」の姿が見えてくるようになる。

以下、『上海』から読みとることが出来るそれぞれの場所の位置関係を箇条書きにしてみよう。但し、煩雑になるため、この節における「上海」内の場所については、括弧を付さない。

・第二章から、トルコ風呂は、魚屋と果物屋が並び、果物屋とその隣の豚屋の間にある歪んだ煉瓦の柱に支えられた深い露路の一角にある。

・第四章の甲谷と山口の行動から、踊場（サラセン）から出ると、

すぐ黄包車を拾うことが出来るほどの街路があり、トルコ風呂と踊場は黄包車で移動する程度の距離であることがわかる。

・トルコ風呂から参木宅へは、第四章の山口、第五章のお杉を追っていくと、一旦黄包車のある大通りに出てから、円柱の並ぶ別の露路に入り、その露路を抜けて裏町を流れる泥溝沿いに歩いていくと着くことがわかる。

・第五章から、参木宅は泥溝に沿った小路に面して建っている家屋の二階にあり、参木宅の窓からは泥溝や小路を見下ろすことが出来る。また、周囲の家々に支那服の洗濯物がかかっていることから、中国人も多く住んでいる地区であることがわかる。

・第四十五章で、参木が汚穢舟の中に突き落とされた橋はお杉宅の近くにあり、参木宅とお杉宅は泥溝を挟んでそれぞれ対岸にあることがわかる。お杉宅の位置については、先に第二章で詳述したためここでは言及しない。

・参木が突き落とされた橋がかかる泥溝の河下は、起重機や、劉髪に茉莉の花をさしたホヤ売りの少女の描写が、第一章で参木宅を出たお杉がやってきた河の様子と酷似していることから、参木宅やお杉宅附近では泥溝だったものが、河下へ行くと、河と呼ばれるようになると考えられる。（以降、泥溝―河と表記する。）

・第二章では河・河岸という表現と、泥溝という表現が混在していること、お杉は参木宅へ向かっている最中であることから、お杉

と參木が遭遇するのは、參木宅と起重機のある河下との間の泥溝――河に沿ったどこかの地点であると考えられる。

・泥溝――河とは別に、大きな船舶が航行できる突堤に面した河があると考えられ、第七章で舟が橋の穹窿をくぐっていくことから、突堤に面した河と別の河とは、突堤の公園の芝生の先端で合流し、その合流点に橋が架かっていると考えられる。

・第六・七章で、參木宅から商業中心地帯（ビジネスセンター）までの道にはいくつか交差点があり、市場へ続く道がそのどこかで通りと合流していることがわかる。また、突堤（河岸）沿いにビジネスセンターがあり、參木宅の方向からは、常緑銀行があり、その先に村松汽船會社がある。金塊市場もビジネスセンターにある。ビジネスセンターの方から橋を渡ると、河沿いに赤色ロシアの領事館がある。

・春婦たちがたむろする、噴水のある橋の袂の公園は、表現の酷似から、河岸の公園・突堤の公園と表記される公園と同じ場所であると考えられる。突堤の公園には菩提樹や花壇のある芝生があり、波打ち際に面したベンチがあつて、噴水があり、そこからは対岸に英米煙草と発電所が見える。

・參木のいる東洋綿絲會社は、突堤に面した大きな河の北側（第二章で工場の南の廊下が河に面しているとある）に位置し、第四五章の參木の回想から泥溝――河の河口附近の、河との合流地点付近にあ

ると考えられる。

・第三章で參木が無軌道電車の走っている道をバーテルに向かう途中、建物のあいだ越しに駆逐艦が見え、街をまがるとまっすぐな街区にある工部局警察の前に群衆が集まり、動乱が発生する。參木と秋蘭が逃げ込んだホテルからは動乱の発生した現場を見下ろすことが出来る。

・第三章で工部局周辺の街路から總商會附近へと群衆が流れていく際の描写から、街路の両側に外人店舗や日本人の踊子たちがいる場所があり、電車が走っていることがわかる。

・第三八章で、ある街角で秋蘭を見かけたように思った參木は、そちらへ歩いていこうとして停まる。すると、前方から来た米國騎馬隊が両側の家屋から狙撃される。そこへ、工部局からきた機関銃が家屋の前に設置されて打ち込まれる。參木は例のホテルの前まできて、秋蘭の通りそうな門の下をいったりきたりし、男装の秋蘭から手紙を受け取ると、暫く彼女を追い、その後引き返して、「今さきまで鬱々として通つた道」を通り抜けると、二つの河の合流点の橋にたどり着き、例の公園の波打ち際までいく。

・第四章で、甲谷は山口宅へ向かう途中、煉瓦の弓門のところまでトラックを襲撃する群衆と遭遇する。甲谷は露路へ入って河岸へ出る。弓門の見える建物の裾から弓門附近の群衆が去つたのを見て、街路を山口宅へ向けて走る。右に折れるとアメリカの駐屯兵の屯所

があり、そこを抜けると橋があり、橋を渡ると次の街角から英国兵があらわれる。山口宅は煉瓦の弓門の近くにあり、窓から傾いた橋や泥船が見えるところにある。

・弓門・アーチの門は、第三章の山口宅への途中、第二章の酒場附近でも登場する。また、第三章で参木が秋蘭を待っている門もあり、これらを同じものと考えたと、これらの場所から、山口宅が動乱の真っ直中にあるということがわかる。

・第二十・四五章で、宮子宅はサラセンから黄包車で移動する距離にあり、危険区域にあつて、宮子宅を出ると、車の通る通りがあり、そこから泥溝に沿った道へいくことができることがわかる。

およそ、以上のような特徴が「上海」という街の姿として読みとれる。

第三節 「出来事」をめぐるカレンダー

次に、第二章と同様の方法で、『上海』の「出来事」についてまとめると以下の通りとなる。「某月日」はある一日を表す。つまり、第一章から第五章の前半は同じ日の「出来事」であるという意味である。

「某月日一」第一章から第五章前半⁽³¹⁾まで
「某月日二」第五章後半⁽³²⁾から第十章まで

「某月日三」第一章

「某月日四」第二章から第五章まで

「某月日五」第六章から第十八章まで

「某月日六」第十九章

「某月日七」第二十から第二十一章まで

「某月日八」第二章から第二十三章まで

「某月日九」第四章から第二十五章まで

「某月日十」第二十六章から第二十八章まで

「某月日十一」第二十九章

「某月日十二」第三十章

「某月日十三」第三十一章

「某月日十四」第三十二章

「某月日十五」第三十三章

「某月日十六」第三十四章

「某月日十七」第三十五章から第三十七章まで

「某月日十八」第三十八章⁽³³⁾前半

「某月日十九」第三十八章後半⁽³⁴⁾から第三十九章まで

「某月日二十」第四十章から第四十五章まで

第一章から第四章までの「某月日一」は参木と甲谷がすれ違いを演じるところから、一連の出来事、つまりこれらの章は同じ「某月

日一」の出来事であると考えられる。第五章で行くあてのないお杉は参木の下宿へ来て、深夜甲谷に襲われるが、これは第三章の続きである。その次の朝は、お杉が甲谷に襲われた翌朝のことであるから、「某月日一」の翌日（「某月日二」）であることがわかる。第六章では、お杉がやってきたのは「昨夜」となっていることから、第六章は「某月日二」であることがわかる。第七章では甲谷が参木と別れて自分の会社へ行くことから、これもまた第六章の続きである。第八章で参木は常緑銀行を首になる。そして、第九章でお杉を食事に誘った参木は、彼女に「自分も首になったことを話さうかと思つた」ところから、これらは連続した出来事であると考えられる。第十章は第九章で参木とお杉が入った旗亭の様子から始まることから、これも第九章と時間的に連続している。第九章では「某月日一」が「昨夜」となっているので、これらは「某月日二」のことである。

第一章（「某月日三」）では、甲谷が「某月日一」でお杉を襲ったときのことを「一昨々夜」と回想している。参木が山口の家にいる第二章から第四章までは、一連の出来事と考えられ、「某月日一」の三日後（「某月日四」）であることがわかる。第五章では、参木たちが出勤してから「三日間」経っているのので、「某月日四」と同日であることがわかる。第十六章は「釋尊降誕祭」で「某月日四」の翌日である（「某月日五」）。参木はこの後、甲谷と会う約束を

しているといつてすぐに山口と別れ、第十七章で甲谷と会っていることから、「某月日五」である。第十八章は二人がそのまま向かった高重の家の場面であることから、これも「某月日五」であると思われる。

以上を総合すると第一章から第五章の前半までは「某月日一」、第五章の後半から第十章までは「某月日二」、第十一章は「某月日三」、第十二章から第十五章までは「某月日四」、第十六章から第十八章は「某月日五」であり「釋尊降誕祭」である。

次に第十九章から第二十章、第二十一章であるが、このあたりは、他の章との前後関係を示す手がかりがない。ただし、第十八章で高重に幹旋依頼した職に、第十九章で参木が就いていることから、「某月日五」以降としてよからう（「某月日六」）。また、第二十章で参木と甲谷と宮子の三人は、宮子の仕事のはねた後、そのまま彼女の家へ向かうので、第二十章と第二十一章は同日（「某月日七」）とする。

さて第二章、露路の奥の酒場で待ち合わせた参木と高重は、第二章で東洋紡績の夜業の見回りをしていことから、これらは一連の出来事である（「某月日八」）。第四章は第三章の暴動の翌朝であることがわかる（「某月日九」）。この日に工場の大罷業が行われるという情報は第二章でもたらされている。

ここで少し順序を変えて、先に第四章と第七章とのつながりをみておこう。「某月日八」の暴動で秋蘭を救い出した参木は彼女

の隣室で「眠ってしまった」。そして、翌朝「某月日九」にはすっかりと「眼を醒した」ようである。このときの参木は「芳秋蘭の幻想」に襲われているように思えない。どうやら第二十七章の冒頭で「昨夜から襲はれ続けた芳秋蘭の幻想」と書かれている「昨夜」というのは、「某月日八」の夜とは違うようだ。しかし、もしここで「某月日八」から何日も経っているのであれば、「昨夜から」とわざわざことわる必要はあるまい。すると、第二十七章の「昨夜」は、参木が秋蘭の家に泊まった翌晩（「某月日九」の晩）であると考えるのが妥当であると思われる。つまり、第二十七章は第二十四章の翌日（「某月日十」となる。

その間に挟まれた、第二十五章と第二十六章はどうか。第二十五章では、すでに春婦になっているお杉によって、「某月日四」から「十日間」が経過していることがわかる。第二十六章では秋蘭たちの計画していた邦人紡績会社の大罷業が発生しており、上海中の在華紡に飛び火していると参木が既に知っていることから、少なくとも「某月日九」以降（「某月日十」）であると考えて差し支えないと思われる。それでは、第二十五章を「某月日九」とするか、「某月日十」ととるかということであるが、結論としては、第二十四章と同日であるとしたほうが適当かと思われる。

一連の状況を整理してみると、「某月日九」の朝、参木は秋蘭と別れて家へ帰る。その途中、第二十五章でお杉は参木を見つけて後を

追う。そしてその晩、参木はずっと秋蘭の幻想に悩まされ続け、翌日（「某月日十」）食堂で食事をする（第二十六章）。その参木を第二十七章で尋ねてきたのが甲谷であり、そこでようやく参木は秋蘭の幻想から自由になる。やがてそのまま甲谷はトルコ風呂へ、参木はストリップ小屋へ出かけていき、第二十八章の甲谷と銭石山の会談へと場面がつながっていく。

次に、第二十九章ではダンスホールの欧米人たちが罷業について語っていることから、「某月日九」の罷業以降であることがわかるが、他の章との詳しい関係は読みとれない（「某月日十一」）。第三十章では、章の関係からいけば「某月日八」以降であるといえる。『上海』の外部の情報に照らして日付を特定し得るヒントは随所にあるのだが、『上海』の記述のみではこの日を特定できないため、ここでは「某月日十二」としておく。第三十一章（「某月日十三」）では、山口がアムリの店を訪ね、第三十章の東洋綿における発砲事件が話題になっていることから、「某月日十二」以降であることがわかる。

次の第三二章は、この小説が単行本化されるに伴って、「午前」という短編の形で書かれていた短編が挿入されたものである。その前後の章との「時間」の関係を示す表現は少なく、「某月日十四」としておく。³⁵

第三三章では、一六一頁の八行目までは「某月日十二」以降の「出来事」に関する情報が寄せられているため、一日間の出来事と

してくぐることは出来ない。但し、一六一頁の九行目からを「某月日十五」とする。

第三四章も冒頭の四行は、それ以前の「出来事」が描かれている。五行目以降では、参木が工部局前で事件に遭遇する（「某月日十六」）。第三五章は第三四章の翌日であり、第三六章では、「参木が漸く群衆から放れて家へ歸る」とあることから、第三六章の参木と甲谷の会話は、第三五章の続きであることがわかる。また、第三六章の終わりに甲谷は参木の部屋から出て行く。これは、やはり宮子にもう一度結婚の申し込みを行って来ると解釈するのが妥当であろう。すると、甲谷が宮子に決定的に結婚を断られてしまう第三七章は、第三六章の続きであり、第三五章から第三七章までは同じ日の出来事であることがわかる（「某月日十七」）。

「特別納税會議」が開かれたとある第三八章の前半は、第三五章の「二日の後」（「某月日十八」）である。そして罷市で銀行が危なくなるのは、第三六章の「明日」である。第三五章と第三六章は同じ日であると考えられるので、第三八章の中でも、後半の「その日の夕刻」以降は、第一段落の罷市決行の部分の翌日（「某月日十九」）であることがわかる。そして第三九章では、その内容から、第三八章後半以降と連続していると考えてよからう。

第四十章では、上海の罷市がますます深刻になり、食糧難に見舞われた参木と甲谷は、それぞれに危険区域を越えて食糧を求めに行

く。第四章では、甲谷が「夕暮」の街を山口の家へ行く途中、群衆に襲われる。そして第四章で「陽がもう全く暮れてから」山口の家で食事にありつく。その後、第三章で死体処理場を見た後、甲谷はオルガを紹介される。これらは一連の出来事で、同じ日（「某月日二十」）である。

また、第四章で参木が食糧難を訴えていることから、おそらくこれは、第四十章で甲谷と別れた後のことであろう。結局ひとむしりのパンを手に入れた参木は宮子の家を追い出され、第五章でそれを食べていることから、第四章と第五章は一連の出来事であるのがわかる。つまり、第四十章から第五章までは同じ日の夕刻から夜中にかけての出来事である。

第四節 「上海」での「出来事」とは

ここまで、登場人物や別視点によって得られる情報から、「上海」という街でのそれぞれの場所の位置関係と、そこでの「出来事」を日付ごとにくくりだしてみた。これらの作業から何が読みとれるであろうか。

建物の位置関係と、その間を移動する登場人物群の行動を追っていくと、「上海」という街は「バンド」や「銀行」、「トルコ風呂」といった上海らしさを喚起する個々の場所を、「街路」「露路」や「泥溝」「河」との位置関係、詳細に描きこまれた微細な事物などを

表 アルファベットはそれぞれ登場人物をあらわし、番号順にその場所へ移動したことを示している。略号は以下の通り。s：参木、
k：甲谷、r：お柳、g：お杉、t：高重、y：山口、h：芳秋蘭、w：西洋人、m：宮子、o：オルガ、b：別視点

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
突堤	s			k1			k6																
トルコ風呂入口露路に続く大通り				y5,t3	g3																		
トルコ風呂入口の露路		b		y4,t2	g2																		
トルコ風呂		k,r	s,g,r	y3,t1	g1																		
サラセン				k2,y1,m, h1,w																s1,k1, m1			
サラセンの外の街路				k3,h2,y2																			
参木宅周辺の泥溝沿いの道					g4																		
参木宅					g5,k1,s																		
通り（参木宅→バンド）						s,k																	
銀行							s	s1															
バンドの街路							k1	s2									k2						
金塊市場							k2,4																
村松汽船会社							k3										k1						
ロシア領事館							k5																
露地（錠前屋と鳥屋の間）									g1,s1														
露路（茶館付近）										s4													
茶館										s3													
磨かれた道路									s2,g2	s2,g2,s4													
旗亭									s3,g3	s1,g1													
池のある公園											m1,k1												
バレス=ホテル											m2,k2												
舗道（→山口宅）												s,o											
山口宅													s,o	s,o									
泥溝に沿った道（河下）															g1								
橋															g2								
露路（外白渡橋付近）															g3								
バラモン寺院周辺道路															y,s1								
バラモン寺院からパーテル															s2								
パーテル																	k3,s1						
パーテルから高重の家																	s2,k4						
高重宅																		t,k,s					
東洋紡取引部																			s1				
東洋紡工場広場																			s2			s2,h2	
サラセンから宮子宅																				s2,k2, m2			

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
宮子宅																					s1,m,(k)		
宮子宅の外																					s2		
弓門付近の酒場までの露路																						s1	
露地奥酒場																						s2,t1	
酒場の外																						s3,t2	
東洋紡工場																							s1,t1,h1
(醫院)																							
秋蘭宅																							
支那街(秋蘭宅→旗亭)																							
支那街旗亭																							
旗亭の外																							
参木宅の中庭																							
裸踊り																							
樓上																							
アムリの宝石商																							
アムリの宝石商の外																							
お杉の売春宿																							
市場																							
公園																							
上海市中																							
道(河岸沿い)																							
真っ直ぐに延びた街路(警察前)																							
ホテル																							
街路(→工部局)																							
街路(總商會ホール)																							
街路(市政會館)																							
露地の片隅(発砲した家)																							
街路(秋蘭と逢った建物前)																							
市街(日本街の外郭)																							
街路(安全な街)																							
租界外の危険區域																							
山口宅地下室																							
泥溝に沿った道																							
橋(泥溝)・汚穢舟																							

	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
突堤																						
トルコ風呂入口露路に続く大通								y2														
トルコ風呂入口の露路								y1														
トルコ風呂					k1,r1																	
						m,w, s																
サラセン																						
サラセンの外の街路																						
参木宅周辺の泥溝沿いの道		g1,s		s3,k3																		
参木宅			s	s1,k1									s2,k									
通り (参木宅→バンド)																						
銀行																						
バンドの街路									g3													
金塊市場																						
村松汽船会社																						
ロシア領事館																						
露地 (錠前屋と鳥屋の間)		g2																			s4	
露路 (茶館付近)																						
茶館																						
磨かれた道路																						
旗亭																						
池のある公園																						
パレス=ホテル																						
舗道 (→山口宅)																						
山口宅																		k3,y	k1,y1	k,y,o		
泥溝に沿った道 (河下)																						
橋															s4							
露路 (外白渡橋付近)																						
バラモン寺院周辺道路																						
バラモン寺院からパーテル																						
パーテル																						
パーテルから高重の家																						
高重宅																						
東洋紡取引部																						
東洋紡工場広場							t2			s												
サラセンから宮子宅																						

	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
宮子宅																s,m					s1,s3,m1,m3	
宮子宅の外																					s2,s4,m2	s1
弓門付近の酒場までの露路																						
露地奥酒場																						
酒場の外																						
東洋紡工場							t1			t												
(醫院)	(s,h)																					
秋蘭宅	s1,h1																					
支那街(秋蘭宅→旗亭)	s2,h2																					
支那街旗亭	s3,h3																					
旗亭の外	s4																					
参木宅の中庭				s2,k2																		
裸踊り				s4																		
					k2,z,r2																	
楼上																						
アムリの宝石商								y3,a1														
アムリの宝石商の外								y4,a2														
お杉の売春宿										g1												s5,g
市場										g2,k,r												
公園										g4					k,m	s5						
上海市中											b	b						b				
道(河岸沿い)											s1											
真っ直ぐに延びた街路(警察)											s2,h1											
ホテル											s3,h2											
街路(→工部局)												s1										
街路(總商會ホール)												s2	s1									
街路(市政會館)																s1						
露地の片隅(発砲した家)																s2						
街路(秋蘭と逢った建物前)																s3,h						
市街(日本街の外郭)																	s0					
街路(安全な街)																	s1,k1	k1				
租界外の危険区域																		k2				
山口宅地下室																			k2,y2			
泥溝に沿った道																						s2
橋(泥溝)・汚機丹																						s3

手がかりにつなぎ合わせることによって、読者の前にそのかたちをあらわしてくることがわかる。同様に、「出来事」を追って一日単位でまとめると、『上海』の全四五章が、二十の「某月日」の「出来事」であるということが見えてくる。

また、『上海』の中心的な「出来事」は、五・三〇事件をモデルにした事件であり、その動乱の様子がクローズアップされることが多いが、実のところ、『上海』では、最初の東洋紡績での動乱が発生した第二章よりも前の部分が、全体の約四割を占めている。動乱のみを描くのではなく、動乱以前の「上海」の姿も丹念に描かれているのである。

表は、「上海」中の場所を登場した順に縦軸にとり、各章を横軸にとつて、登場人物のおおよその移動経路を示したものである。

これを見ると、第二章以降の『上海』の舞台は、動乱の巷を除くと、サラセンやトルコ風呂、東洋綿絲の工場、参木宅、山口宅、宮子宅、突堤の公園といった、既に登場している場所が多い。動乱以降に新たに登場するのは、秋蘭宅周辺の支那街、お杉宅、市場、アムリの商店ぐらゐであり、動乱が生じる以前に描かれた場所と比べると、明らかに少ない。

これは、同じ場所を異なる様相で描きわけているために生じることである。たとえば、第二章で参木とオルガは静かな夜道を山口宅へ歩いているが、第四章から第三章になると、山口宅周辺で

は死人がでるありさまである。第九章では人込みの中をお杉と歩いていた参木は、第四十章で人通りの絶えた街を、一人好んで歩きまわっている。

これは、『上海』全体を通して、「上海」が動乱の前後ですっかり様変わりしてしまう様子を対比してみせるための仕掛けと考えてよからう。膨大な作業を経て得られる結論にしては、あまりにも単純かつ当たり前のことではあるが、これは、横光の晩年の労作『旅愁』を射程にいった主人公の日本帰郷願望を強調するための文脈、すなわち『上海』の最後に汚穢舟に投げ落とされた参木が、故郷の肥料の匂いと母親を思い出し、お杉宅にたどり着いてつかの間の安寧を得るといふ「SHANGHAI 1925」の文脈からは、動乱以前の部分に対する目配りが不十分であるために、抜け落ちてしまっている点なのである。

動乱の前と後。「出来事」が深刻になっていくにつれ、「上海」の姿も変化していく。いずれ秩序が回復するであろうと匂わせながらも、秩序の回復それ自身を描かなかったのは、「上海」という街が、この動乱という「出来事」によって変化したということを、描ききするための横光の目論見だったのではないだろうか。

さらにここで、第二章で触れた改稿による「上海」と「出来事」への影響について述べておこう。初版本の第四章では、トルコ風呂へ出かけた山口が高重と話をする場面が加筆されている。第一章

では、『改造』初出版の「ランタン・カフェ」が、初版本で「パレス・ホテル」となっており、前者では公園内の様子しかないのに対し、後者では「パレス・ホテル」までの移動についても加筆されている。第二十八章では、トルコ風呂の二階の楼上での甲谷と銭石山との対話が大幅に加筆されている。第三一章では、山口がアムリの商店を訪ねるエピソードが加筆されている。第三二章については、第三章第三節において述べたとおりである。第三十八章では、参木が秋蘭を待ち、手紙を受け取って「突堤の公園」へ行く場面が加筆されている。そして、『改造』初出版の「海港章」は、初版本になるより前の、昭和六年に発表された「婦人―海港章―」「春婦―海港章―」によって改稿・加筆され、それが初版本に継承されている。すなわち、飢えた甲谷が山口宅を訪ねる場面が「婦人―海港章―」によって加筆され、参木が汚穢舟からはい上る場面以降が「春婦―海港章―」によって、改稿・加筆されている部分である。

これらの加筆部分は、第三章第二節における「上海」の再構成に関わってくる。「婦人」と「春婦」から第四一章、第四五章に継承された部分は、山口宅の位置や参木宅とお杉宅との位置関係など、「上海」再構成でもこの部分がなければ明らかに不自然で、重要な要素を担っているからである。しかし、その一方で、「出来事」についてはその時系列を大きく乱すような改稿は行われていないようだ。

つまり、「出来事」については、昭和三年から四年にかけて連載された時期からすでに、どういう「出来事」を書くかという構想は、横光のなかで固まっていたが、「上海」については、昭和六年になって出された「婦人」「春婦」で改めて構成し直し、「五・三〇事件」の前と後との対応関係を作り上げようとした、と考えることができるだろう。

第四章 地図と史実と『上海』と

ここまで、『上海』から読み取ることの出来る情報をもとに「上海」という街とそこでの「出来事」を再構成し、横光の目論見がいかなるものであったのかという点についてみてきた。次に、『上海』の記述そのもの以外から得られる、地理的・歴史的な情報と比較すること、『上海』という作品の世界が組み立てられる際に、どのような操作が行われているのかをみてみたい。

第一節 「上海」という街

第三章第二節では、「上海」の特徴を箇条書きに列挙したが、それらが上海の地理的・歴史的な情報と照らし合わせた場合に、いかなる部分で整合し、また齟齬をきたしているのだろうか。たとえば、渡辺一民はこのように述べている。

『上海』の小説空間は、いま上海市街図を脳裡に浮かべてみれば、参木が鹹になるまで勤めていた常緑銀行や甲谷が上海滞在中出勤していた村松汽船会社のある、バンドと南京路、河南路、漢口路にかこまれた商業地帯、お柳のトルコ風呂とサラセンのほか参木と甲谷がいつも落ち合うパテル・カフェーや参木がお杉を連れていった旗亭や老閘捕房のある、南京路とその周辺の繁華街、それにそこからさして遠いとは思われぬ京子のアパートまで含めたいわば横長の楕円で囲まれる上海の都心部を中心において、そこから北東に、参木やお杉の下宿のある北四川路沿いの日本人街へ、東に、黄浦江沿岸の東洋綿糸の工場へ、北西に、山口の家や宝石商サムリの店のあると覚しい共同租界外の北站停車場附近へと、頭上の三本の触手のようにのばされた線で画定された地域と、いちおう規定することができるであろう。(中略) 主要空間から切り離され孤立したかたちで、芳秋蘭の住む、フランス租界の南のかつての城壁でかこまれていた中国人街城内があった、それだけが他の都市空間とは異質なひとつのユートピアのようなものとして存在していることだけここでは指摘しておこう。⁽³⁶⁾

渡辺による場所の比定は、ほぼ妥当なものであると考えられるが、残念な事にその場所に比定した根拠がほとんど述べられていない。

ここでは、「上海」に描かれた場所がどのあたりに位置するものかを検証した上、通説と異なる筆者の見解を示してみたい。

まず、「突堤」については、すでに通説となっているように、黄浦江沿いの船着き場のことと考えてよからう。地図に見る限り、黄浦江に沿って带状に草地と表現されたところがあり、そこから船着き場が丁の字型に突き出している。『上海』にも「突堤」という表現で、船着き場そのものの他に突堤沿いの公園を指していることが多く、『上海』の表現とのあいだに問題は生じない。

また、「常緑銀行」「村松汽船會社」「金塊市場」のある「商業中心地域」は黄浦江沿いのバンドと考えて差し支えない。第七章で甲谷は、バンド沿いに南から北へ歩いていき、「橋」つまり外白渡橋(ガーデンブリッジ)を渡って「ロシア領事館」の前までいったということだろう。

甲谷と宮子が逢う「公園」は、これも定説となっているように、パブリックガーデンのことであり、「バレス・ホテル」は南京路とバンドの角にあるバレス・ホテルのことと考えられる。

第九・十章で参木とお杉が入った「旗亭」からは、「招牌や幟」がかかった人通りの多い街路が見えるため、これを南京路や福州路の繁華街と推測することは出来るが、確証はない。

また、「トルコ風呂」の具体的な位置の比定は難しい。横光が通っていたという四川路のトルコ風呂をモデルとする説が井上謙『評

伝「横光利一」で出されているが、⁽³⁷⁾これが四川路にあるとする根拠は、上海在住で参木のモデルといわれる今鷹氏の証言によっている。川西政明は、虹口にあった唯一のトルコ風呂について言及しているが、川西自身もこれをお柳の「トルコ風呂」に比定するかどうかについては保留している。⁽³⁸⁾「踊場（サラセン）」も、葛の絡まっている外観や、街路樹のある道路に面しているについての記述はあるが、具体的な位置を比定するための決め手に欠けている。

「山口宅」「アムリの寶石店」については、渡辺一民が「山口の家」や宝石商サマリ^{（アムリ）}の店のあると覚しい共同租界外の北站停車場附近」と述べている。第四章で「山口宅」を訪ねていく甲谷は、「河岸」まで路地一本の「煉瓦の弓門」附近で発見され、「山口宅」へと命からがら走っていくわけであるが、河岸から北站停車場附近までは距離があり過ぎるように思える。むしろ、虹口あたりと考えたほうが、辻褄が合うのではないだろうか。

参木が甲谷と待ち合わせをする「バーテル」へは河岸から南京路を経由して行くことが出来る。それは、参木が「バーテル」へ行こうとして南京路へ入り、雲南路の交差点で発砲事件に巻き込まれたことからわかる。

「高重宅」の位置は不明であるが、窓から「英国兵の駐屯所」がみられるところから、「駐屯所」の場所がわかれば、特定すること可能であろう。「宮子宅」の位置、参木と甲谷がよく行く「食堂」

の位置も不明である。ただし、「宮子宅」は「危険区域」にあり、「食堂」は「安全区域」にあるということは『上海』の記述からわかっていいる。「裸踊り」の場所も「食堂」の近くだということ以外、よくわからない。

「東洋綿絲會社」は蘇州河の合流点附近の黄浦江沿いに位置しているというのも通説となっている。「東洋綿」のモデルとなった内綿自体は蘇州河の南岸の普陀地区にいくつも工場を持っているが、『上海』では、それを黄浦江沿いに設定している。

参木と高重が夜業の前に待ち合わせた「酒場」は、「弓門」近くの路地にある。この「弓門」と参木が秋蘭を待っていたところと同じ場所であれば、「酒場」は南京路の近くであると考えることができる。

「秋蘭宅」とその近所の「旗亭」は旧市街である城内の一角にあるというのが定説になっており、そう考えることに何ら問題はない。

上海に市場はたくさんあるので、お杉の買い物に行った「市場」がどこかを突き止めるのは困難だが、虹口のマーケットであると考えても支障をきたす事はない。

また、動乱の巷となった「街路」については、南京路に比定するのが通説であり、そのことと『上海』の記述との間に何ら問題は生じない。最初に発砲の行われた巡捕房、納税者会議が流会した市政

廳、騎馬隊に向けて発砲のあった新世界周辺など、これらはすべて南京路を挟んだ廣西路から西藏路までの四ブロックの街区に集中している。よって、第三章で参木が行ったりきたりしていたのは南京路ではないかと推測する事が出来る。

ところで「参木宅」と「お杉宅」が虹口の日本人居住区にあるというのは、すでに通説となっている。高橋孝助・古厩忠夫編『上海史⁽³⁹⁾』によれば、バンドあたりに勤める銀行マンや商社マンは、虹口の北四川路附近にアパートメントを構え、黄包車で通勤していたという。銀行マンをしていた頃の参木と甲谷の暮らしぶりは、まさに当時のエリートのものであったのである。

また、「参木宅」周辺には中国人も多く居住していると考えられるが、虹口が本格的な日本人街として、日本人中心の街となっていくのは、第一次上海事変以降のことであり、まだ一九二五年当時は多くの中国人が虹口に居住していたという。

さらに、虹口を南流して黄浦江に注ぐ虹河（浜虹河と新紅浜河が途中で合流する）を「泥溝―河」のことであるとすると、「泥溝―河」を見下ろす位置にある「参木宅」はまさに虹口の一角にあることになる。すると必然的に、「参木宅」から「泥溝―河」を挟んで近くにある「お杉宅」も虹口にあることになる。

しかし、「お杉宅」に行く前に、参木は「橋」の上から汚穢舟に落とされている。この「橋」とはどこであろう。

渡辺浩平『上海路上探検』の「老閘橋の西が浙江路、橋の旧名を「老垃圾橋（旧ゴミ橋）」という。往事、共同租界の屎尿とゴミはこの橋から船積みされ、農村へと運ばれた。その西の西藏路の橋が、旧名「新垃圾橋（新ゴミ橋）」で同様の理由の命名である⁽⁴⁰⁾という記述からすると、参木が落とされた「橋」は蘇州河に架かっているものと考えられるのである。浙江路橋（老垃圾橋）や西藏路橋（新垃圾橋）から虹口へは決して手近とは言えないし、「参木宅」へ戻るのも「お杉宅」へ向かうのかもしれないに違いない。この点だけにこだわるなら、西藏路橋のたもとから南へ西藏路沿いにのびる泥城河を「泥溝」、泥城河の合流する蘇州河を「河」、これらをあわせて「泥溝―河」と考えることも可能である。

以上のように、上海の地理的な情報と『上海』の記述を照らし合わせてみた。その結果、渡辺一民の場所の比定とは重なるところも多いが、本稿では、前もって、『上海』に描かれた場所同士の相互的な位置関係を割り出す作業を行ったため、「山口宅」の場所が閘北の北站停車場附近ではないかということ、「参木宅」と「お杉宅」が、あながち虹口の日本人街にあるとはいえないということを示し得たと考える。

渡辺一民は、『上海』『人間の条件』『子夜』の三つの作品を比較し、「上海の都市空間全体が、まるで申しあわせたかのように三つの小説によってきれいに三つに切り分けられている」と述べてい

るが、少なくとも『上海』に描かれた「上海」については、この図式は有効性を疑われることになろう。上海の様々な場所で見られる光景を取り込んでくる事によって、「上海」は一筋縄ではないかない広がりをもてるのである。

第二節 「出来事」の時系列

次に、第三章第三節で再構成した「出来事」をもとに、『上海』外部の情報による日付の特定を行ってみたい。まず、最初の手がかりは、第一章の「釋尊降誕祭」という記述である。⁽⁴²⁾つまり、「某月日五」は四月八日なのである。

すると、「某月日一」は四月三日、「某月日二」は四月四日、「某月日三」は四月六日、「某月日四」は四月七日となる。「某月日六」と「某月日七」の手がかりは、「某月日五」以降であるということ以外なく、外部の情報との接点もないため、具体的には決定できない。

次の手がかりは、「某月日四」でお杉が「参木宅」を出てから、「某月日九」で十日経っているということである。そこで、「某月日八」は四月十六日、「某月日九」は四月十七日、「某月日十」は四月十八日となる。ここで、「某月日六」と「某月日七」は、四月八日から四月十八日までとなる。

「某月日十一」もこれという手がかりがない。ただ、「東洋綿」で

罷業が発生していることは周知となっているため、四月十七日以降であることはわかる。

「某月日十二」では、「東洋綿」において日本人社員またはインド人警官による中国人の群衆への発砲が行われる。これは、五・三〇事件の引き金となった、内外綿での発砲事件に比定されるため、五月十五日となる。⁽⁴³⁾

「某月日十三」「某月日十四」ともに、日付はわからない。⁽⁴⁴⁾

「某月日十五」では、「某月日十二」の発砲事件で死亡した工人の葬儀の様子が描かれているため、五月十八日に比定される。⁽⁴⁵⁾

「某月日十六」に参木が遭遇した「出来事」は、事実上の五・三〇事件に比定されるので、この日は五月三十日である。そこから「某月日十七」は五月三十一日となる。また「某月日十八」は六月一日からの罷市決行に比定され、「某月日十九」は「特別納税會議」が開かれた日であることから、六月二日に比定される。そして「某月日二十」の翌日には、「陸戦隊」が「上海」に上陸する手はずになっていることから、六月七日に比定される。⁽⁴⁶⁾

以上より、『上海』は「四月三日」から「六月七日」の「出来事」であることがわかった。特定の「日付」を持たない『上海』であっても、それぞれの「出来事」の前後関係を明らかにした上で、それらの「出来事」自体を史実と比較する事で、ある程度の時系列を明らかにする事は可能だといえるだろう。

次に、史実が横光によってどのように『上海』に取り込まれていたかを検討してみよう。

まず、第七章では「イギリス政府の護謨制限撤廃の聲明」というのが出てくる。『上海』では、声明のためにシンガポールの市場が恐慌をきたし、甲谷の扱う木材まで売れなくなっているという設定である。ゴムの生産制限撤廃の声明が出されたのは、一九二八年四月四日のことであり、実際に撤廃されたのは同年十月のことであるが、これが一九二五年の四月まで繰り上げられているのである。

他にも繰り上げられている設定として重要なものは、山口とアムリの第三章における会話に登場する、「ヤワハラル・ネール」の共産党への鞍替えという表現である。ここで名前が登場した、ジャワハラル・ネール（二八八九—一九六四）は、後に独立インドの初代首相となる人物だが、国民会議派の政党指導者として活動し、通算九回投獄される。彼の経歴中、『上海』の表現に関係してくるのが、一九二七年の二月にブリュッセルで開かれた被抑圧諸民族会議に国民会議派代表として出席したことである。さらに同年十一月、ポリシェビキ革命十周年記念祝典に招待されて、ネールは父と共に参加している。このことは彼に強い印象を与え、帰国後、ソ連礼讃の基調をなす印象記が発表されたという。

『上海』でネールの左傾化といわれているのは、ネールがこれらの社会主義に対して示した態度を指していると考えられる。しかし、

むしろネールはインド共産党から批判を受ける身であり、共産主義とは明らかに一線を画している。彼の役どころは、穏健派と急進派の間の仲介役となりつつ国民会議派を運営することにあつたのである。

『上海』では、一九二七年以降のネールの行動を、五・三〇事件の一九二五年当時に繰り上げてくることで、激しく燃え上がる「共産主義の火の手」を表現しようとしたのであろう。そこで、ネールを共産化させ、共産主義にはしる青年達と反動的な長老達との確執、その両者に挟み撃ちに遭うアムリらアジア主義的国民会議派、という図式を描こうとしたものと思われる。

一方、『上海』では、史実よりも日付を遅らせてある設定も存在する。

そのひとつが、五・三〇事件以前に上海で生じた騒擾及び罷業についてである。罷業が生じたのは、五月だけではない。それより前、二月に内外棉で罷業が発生したそもそのきっかけは、内外棉が二百名ほど職工を解雇したことにあり、彼らは上海の労働団体である滬江工友倶楽部に援助を求めた。そこで、同倶楽部の後援を得て、解雇された工員の全員復職を要求するも容れられず、内外棉の一部の工員と呼応して計画的に罷業を起こしたものである。これら一連の罷業において、最も激烈な様相を呈したのは、豊田紡績で生じた騒擾であるが、これがどこか参木と秋蘭を結びつけたあの暴動を思

わせるのである。

ここで、当時の新聞記事をみてみよう。「遂に騷擾化す 暴徒豊田紡績を襲ひ日本人事務員射撃さる」という見出しがついている二月十六日上海発、二月十七日の大阪朝日新聞の記事である。

豊田紡績は十五日夜暴徒襲來のため仕事を休み門前には二、三十名の巡警が銃を持つて物々しく控へて居る、前夜七時半頃數百名の暴徒は 白旗を立て（筆者注 この部分は大きな活字になつてゐる）『内外操廠』と記した提燈を振りつゝ同工場に襲來し、裏の垣を破り白旗を持つ五六十名の暴徒が多數女工を脅かし彼等を狩り立て門外に逐ひ出した⁽⁴⁷⁾

さらに、外交文書をみてみよう。これは、上海の矢田七太郎総領事から、外務大臣幣原喜重郎のもとへ報告された警察からの機密情報である。もちろん、これらが日本側に立った資料であることを忘れてはならないだろう。

「一 豊田紡績ノ罷業

昨十五日夜に至り罷業ハ更ニ豊田紡績ニ移リ益々執拗ノ度ヲ加ヘ特ニ暴動的色彩濃厚トナレリ同會社に於テハ他工場罷業状態ニ鑑ミ周到ノ注意ヲ拂ヒ職工ノ監視警戒ヲ爲シ居リタルモ同夜

ニ於ケル交代等も異狀ナク行ハレ至極平穩ニ操業ヲ開始シタルカ午後七時三十分頃ニ至リ俄然一部男工ノ態度一変シ「サボタージュ」ニ出テ既ニ外部トノ連絡内通アリタルモノノ如ク刻々蠅集シ來リ、外部群衆ヨリノ喊聲ヲ聞クヤ一齊ニ不穩ノ行動ニ出テ硝子窓電燈等ヲ破壊シ折柄外部ヨリ闖入シタル群衆ノ一部ト呼応シテ粗紡機其他ノ重要機械ヲ手當リ次第ニ打ち壊シ尙ホ一部ノ者は落棉置場ニ至リテ放火スル等大騷擾ヲ惹起シタルガ社員全部ト請願巡警ノ必死ノ努力ニ依リ漸ク午後八時三十分頃職工全部ヲ退散セシムルコトヲ得タリ⁽⁴⁸⁾

新聞記事中の白い旗、動揺する女工達、そして外交文書に書かれた落棉の炎と、どこか『上海』の表現と似通つたものが感じられないであらうか。おそらく当時横光がこの外交文書を目にすることはなかつただろうが、かなり具体的に当時の状況を把握していたのではないかと推測させる。

また、東洋綿絲会社のモデルとなつた内外棉紡績会社での発砲事件以前、確かに内外棉の一部工場で罷業の動きがあるものの、それは『上海』で描かれているほど大規模なものであったとは、当時の新聞記事や外交文書による扱いをみても考えられない。むしろ、三月・四月には二月の罷業の事後処理が中心なのである。つまり、実際には二月にあった出来事を、『上海』では「四月十六日」にも

ってくることで、横光は「五・三〇事件」との間合いを詰めている。以上のように、少なくとも一九二五年二月十五日から一九二八年四月四日のおよそ三年間に亘って生じた出来事が、『上海』では「一九二五年四月三日」から「六月七日」のあいだに詰め込まれている。そのため、『上海』では、多くの「出来事」が矢継ぎ早に起こるという印象を与えるのである。

おわりに

横光利一が『上海』に描き出した「上海」という街とそこでの「出来事」は、第二章以降で検証したように、それぞれの微細な事物から読みとられる連続性をもとに再構成しようという特徴を持っている。そして、それらを再構成する際には、読者の生活実感における空間的または時間的感覚に基づいてなされているのである。横光は、上海らしさを醸し出すいくつかの場所だけではなく、微細な事物を描き込むことで、それらの連続性を感じさせ、それらの場所が一続きの土地の上のことであるという、われわれの生活実感に訴える手法を選んだと言えるだろう。それは、『上海』に描かれた「出来事」と切り離して考えることのできない問題である。なぜならば、『上海』の連続性は、ある空間内を移動する登場人物群から導き出されるものであり、必然的に、時間的要素を内包しているからである。

前田愛は「SHANGHAI 1925」において、参木と三人の女性との関係を通して、『上海』の構造を明らかにしようと試みたが、参木を「カメラ・アイ」という特権的立場に置いたために、『上海』内部で刻々変化する時間的要素がこぼれおちてしまった。

本論では、『上海』の記述を丹念に拾い上げる事により、物語が進展するに従って「上海」の姿も変化する事を指摘し、『上海』の内的な時間的要素と空間的要素の関連について示し得たものと考え。また、地理的・歴史的資料を用いて、作品世界との接点を探る際に生じやすい問題点を指摘し、作品内部の構成を明らかにした上で、資料との対比を行うという方法についての提案を行った。

今後の課題としては、本論で提示した方法が、多くの登場人物が錯綜する『寝園』以降の横光の作品についていかなる射程をもつものであるのか、同時代の他の作家の作品との比較にも有効であるかどうかを見極めることを挙げておきたい。

付記 本稿の「出来事」の時系列に関する部分は、平成八年度の一年間に亘り、当時、奈良女子大学文学部で教鞭をとっておられた濱川勝彦先生のもとで開講された『上海』の演習を聴講させて頂いた結果、生まれたものである。当時濱川先生からはお忙しいなか懇切なご指導を、演習の場で発表を行われた奈良女子大学の皆さんからは多くの示唆を頂くこととなった。また、本論の執筆にあたっては、

国際日本文化研究センターの千田稔先生に一九二〇年代の上海の地図に関する情報を頂き、鈴木貞美先生には具体的な執筆上のアドバイスを頂いた。末筆ながらここに記して御礼申し上げる。

注

- (1) 「風呂と銀行」「足と正義」「掃溜の疑問」「持病と弾丸」「海港章」「婦人―海港章」「春婦―海港章」「午前」のタイトルで「改造」(「午前」のみ「文学クォーター」)に連載された。
- (2) 昭和三年六月十五日消印、改造社の山本實彦宛書簡より抜粋。
『定本横光利一全集第十六卷』改造社、九八頁。
- (3) 前田愛「SHANGHAI 1925」『前田愛著作集第五卷 都市空間のなかの文学』(一九八二)筑摩書房(初出「文学」一九八一、原題「SHANGHAI 1925—都市小説としての『上海』——」)
- (4) 「上海」序 昭和七年七月八日、改造社発行「上海」に初収。
『定本横光利一全集第十六卷』三七〇頁。
- (5) 川端康成の「文藝時評」(『文藝春秋』昭和四年十月號初出、「川端康成全集第三十卷」新潮社、三六八頁)には、「横光利一氏の「持病と弾丸」(改造)―上海を舞臺として、國際産業資本戦と、民族問題と、勞使争闘と、その他の大問題を扱った大作」とある。これは、『改造』昭和四年九月号に掲載された「持病と弾丸」をうけて出た評である。
- (6) 小森陽一「文字・身体・象徴交換」『構造としての語り』(一九八八)新曜社(初出 昭和文学研究、一九八四)

中村三春「非構築の構築―横光利一『上海』の小説言語―」(一九八七)弘前学院大学弘前学院短期大学紀要、二三。

(7) 田中益三「上海」ならびに「支那」―五・三〇事件の余燼と創造―(一九八四)法政大学国文学会、三二卷。

渡辺一民「上海をめぐる(上・下)―一九二〇年代論(Ⅰ)―」『文学』五三・九・十、(一九八五)岩波書店。

川西政明「上海―日本の文学は中国をどう表現したか」『群像』五〇・二、(一九九五)講談社。

八木泉「横光利一『上海』文学地図」『曙光』(一九九六)日中文化研究会編。

- (8) 前掲(3)二六〇頁。
- (9) 前掲(3)二五九頁。
- (10) 前掲(3)二七四頁。
- (11) 前掲(3)二七五頁。
- (12) 前掲(3)二八一頁。
- (13) 横光利一「上海」(『定本横光利一全集第三卷』河出書房新社所収)一〇九頁。
- (14) 同右、一五八頁。
- (15) 館下徹志「横光利一『上海』の五・三〇事件―歴史叙述の反証可能性―」(一九九八)昭和文学研究三七、一一二頁。
- (16) 前掲(3)二六四頁。
- (17) 『満鐵調査資料第四十九編 上海事件に関する報告』(一九二四)南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課、二四頁。
- (18) 前掲(6)中村三春(一九八七)三九頁。

- (19) 前掲(13) 四六一四七頁。
- (20) 前掲(13) 一一七頁。
- (21) 前掲(13) 二三三―二三四頁。
- (22) 前掲(3) 五八頁。
- (23) 前掲(13) 一六六一七三頁。
- (24) 前掲(13) 一七五一七七頁。
- (25) 前掲(13) 一七八頁。
- (26) 前掲(13) 一八四頁。
- (27) 前掲(7) の渡辺(一九八五) は、林達夫論の足がかりとして一九二〇年代の上海を舞台にした三つの小説、横光の『上海』、アン・ドレ・マルローの『人間の条件』、茅盾の『子夜』の比較を主要なテーマとしている。ここでは、『上海』に描かれた個々の場所を根拠の提示なく断定的に実際の上海の場所と比定しているため、『上海』という街が実際の上海と全く同じ構造をもっているものであると、暗黙のうちに了解しているといつてよからう。川西(一九九五)では、『参木以下の日本人が、虹口地区を出て、蘇州河のむこう側(河向う)の旧英租界、仏租界といった魔都上海の地理内の奥深くまで入っていないことである』という一文から、その真偽のほどはさておき、これも『上海』という街が実際の上海と全く同じ構造をもっているものであると、暗黙のうちに了解しているといえよう。八木(一九九六)では、前田の論を全くなぞった上で『作品の基点となる場所の特定もしくは推定を試みることで、『上海』読解の一助としてみたい』と述べ、現在の地図上にそれぞれの場所を落としている。ここでも『上海』という街が実際の上海と同一の構造を持つものと

いうことが前提になっている。

- (28) J. J. ギブソン『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社 (J. J. Gibson "The Ecological Approach to Visual Perception" 1979) 二二―二二五頁。
- (29) ここでいう「景色」とは、「一つの広がりであり、現前する環境の諸要素のレイアウトである。」岡本耕平(一九九八)「行動地理学の歴史と未来」『人文地理』五十一。
- (30) 前掲(28)。
- (31) 前掲(13) 三五頁六行目まで。
- (32) 前掲(13) 三五頁七行目から。
- (33) 前掲(13) 一八四頁六行目まで。
- (34) 前掲(13) 一八四頁七行目から。
- (35) 初版本における第三章は、この小説が単行本化されるに伴って、「午前」という短編の形で書かれていた短編が挿入されたものである。「午前」という短編の外伝にあたるものであり、「出来事」の時系列について、午前中の出来事であることと、お杉が売春婦になって以降のことであるとわかるにすぎない。この部分はそっくり決定版では第二章に移動しているところからもわかるように、他の章との時間的な関係性が比較的希薄であり、その前後の章との関連から、初版本と決定版でこの章の解釈は異なる。初版本では、前の章の山口との関連でお杉の物語をとらえることになるが、決定版では、前の章のお柳と甲谷との関連がより強く意識されることになる。
- (36) 前掲(7) 渡辺一民(一九八五) 五三―九、九一―一〇頁。
- (37) 井上謙『評伝 横光利一』(一九九四)。

- (38) 前掲(7) 川西政明(一九九五) 二三三頁。
- (39) 高橋孝助・古厩忠夫編『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』(一九九五) 東方書店、一一九—一二一頁。
- (40) 渡辺浩平『上海路上探検』(一九九七) 講談社現代新書、一五八頁。
- (41) 前掲(7) 渡辺一民(一九八五) 五三—九、一二頁。
- (42) 一九一一年に清から中華民国になって以来、公式には西暦が採用されている。しかし「釋尊降誕祭」は民間の行事であるため、旧暦を用いると考えられる。しかし、『上海』では「釋尊降誕祭」に集まっているのは印度人であり、これが中国の旧暦による行事かどうかは定かではなく、実際に、釈尊降誕祭が行われていたかどうかとも確認できていない。よって、この章における日付の特定は、ひとまず西暦で行うこととする。
- (43) 外務省「五月十六日 内外綿工場ノ中國従業員ト印度人巡查、邦人従業員トノ衝突ニツキ報告ノ件」『日本外交文書大正十四年第二冊上巻』(一九八三) 四七頁。
- (44) この章は、決定版でも具体的な日付を比定することは出来ないが、五月十五日以降の出来事となる。
- (45) 当時の英国工部局警察の勤務日誌の中国語訳から、この日が五月十八日とわかる。上海市檔案館編(一九九一)『五卅運動 第二輯』七九頁。
- (46) 日本の陸戦隊は、都合三回上海に派遣されている。当時の新聞記事によると、六月二日に第一陣の四十名(外交文書では五十九名)が上海に上陸、しかし、日本人襲撃の被害を防ぐには足りず、六月五日に漢口から戦艦安宅が到着する。そして、長崎から派遣された巡洋艦龍田が七日の夕方に上海に到着、翌八日に陸戦隊を上陸させる筈であると伝えられている。ここでは、「某月日二十」を龍田が到着した六月七日としたい。
- (47) 一九二五年二月十七日付 大阪朝日新聞。
- (48) 前掲(43) 五頁。